

地域のかかりつけ薬局として、医療・介護等の多職種連携により地域包括ケアサービスの提供を目指します

事業のポイント

調剤薬局が、地域での勉強会を主催し多職種連携体を構築。

情報共有システムを導入し、医師、介護施設とのタイムリーな情報交換など、薬の専門家として新たな役割を果たす。

◆薬剤師の新たな役割と連携体によるサービス提供

日本の高齢化進展と医療・介護需要増大を背景に、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを最期まで続けられるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築が進められています。その中で調剤薬局は、特定病院の門前薬局として薬を提供するのではなく、薬の専門家として患者の服薬情報の一元化・継続的な把握、在宅や介護施設での対応を含む薬の管理・指導などが求められています。患者が様々な医療機関を受診して、在宅や介護施設に入所した後も、「かかりつけ薬局」として継続したサポートを行うことを目指すものです。

(有)ライム調剤薬局を中心となり香川県高松市西部地域にて構築した連携体は、中核病院と介護施設、調剤薬局が職種・法人を超えて情報を共有し、必要に応じてお互いが相談・助言し合うことで、より患者のニーズに合った迅速なサービス提供を目指しています。連携体が一つの大きな医療機関になるイメージで、その中で薬剤師は薬の専門家として、例えば医師による在宅や介護施設への診療に同行して、現場において意見交換などを行うほか、処方箋に基づき薬を在宅や介護施設に届けています。

今後、薬剤師は「患者を訪問するなど薬局の外でていく」ことに重点が置かれるべきと考えます。

こうしたことを実現していくために、経済産業省の補助金（ものづくり・商業・サービス革新補助金）を活用して設備を導入し、朝・昼・夕の薬をそれぞれ一パックにまとめる、一包化の自動化による薬局内作業負担の軽減にも取組んでいます。

◆地域中核病院の施設訪問に同行し、地域の関係者が集う自主的な勉強会を主催し連携体構築

もともと医薬品卸売企業にて福祉用具レンタル事業に携わっていました。そのとき、お客様であった社会福祉法人の理事長から介護施設向け調剤薬局のニーズを伺い今の会社を立ち上げました。やがて依頼を受けて西高松脳外科・内科クリニックの薬剤管理を手掛けるようになり、同クリニックが嘱託契約を結んだ施設にも同行するようになりました。そのような中、社会福祉法人牧羊会の施設にて、今後の地域医療・介護の在り方を話合う勉強会を立ち上げることになり、その活動を続ける中で多職種間の情報共有に基づく連携体制の構築に至ったのが、この取組の始まりです。情報共有のためのシステムを

導入し、まずは弊社、西高松脳外科・内科クリニック、社会福祉法人牧羊会 シオンの丘ホームの3者が連携を開始しております。



吉岡 秀雄 有限会社ライム調剤薬局 会長（左）
吉岡 貴代 有限会社ライム調剤薬局 代表取締役（右）

<有限会社ライム調剤薬局連絡先>

【本 社】〒761-8013 香川県高松市香西東町 326-1

TEL: 087-881-4111 / FAX: 087-881-4222

新規登録	登録者数	最終更新日
1(未)	2014/07/18 18:51	
40(未)	2014/07/18 14:33	
2(未)	2014/06/25 16:26	

情報共有システムの画面

◆情報共有システムを活用した連携について

- 多職種間・施設間の情報共有システムの使い方は、LINEのようなSNS(ソーシャルネットワークサービス)と同様です。スマートフォンやタブレット端末、パソコンを立ち上げて患者の情報を見て欲しい連携体の医師や看護師などにメッセージや写真などの画像データを送ったりします。画像データ化のためには、パソコン画面をスクリーンショットで撮ったり、デジタルカメラで撮影する必要もあり、ひと手間かかるのも事実ですが、逆に情報システム上で複雑な操作を行う必要がないため、パソコンなどの操作に慣れていない方などにとっては簡単で扱いやすいとの声があります。
- 最初はお互い何を情報共有すればよいのか分からず、手当たり次第にデータを送ってしまい、量が多すぎて確認しきれないといった問題もありました。しかし、使っていくうちに必要、不必要な情報をお互いに選別できるようになりました。また、緊急の診察時に、電話では説明に時間がかかる情報を共有できるなど、使い方も分かってきました。例えば、夜間の緊急時に医師へ「画像を入れておきます」と電話して、直接患部の状態を撮った写真と医師へのメッセージなどを送ることで迅速な対応が可能になります。また、情報共有システムは電話と異なり、手の空いた時に確認することができるため、送られてきた患者の状態や看護師やヘルパーなどからの気付きのコメントを見て「そうなのか」と分かるだけでも、その次の行動に反映できます。
- 重要度は星印で3段階に設定し、一番重要度が高い連絡は即確認するものとして、それ以外は当日中に確認するなどの運用ルールを定めています。今は、関係機関にとってなくてはならないツールになっています。
- 情報共有は、あくまで本人の同意が必要です。現在は、西高松脳外科・内科クリニックを受診する患者で同意を得た方に限定しています。

西高松脳外科・内科クリニック 野村 哲也 副院長

- 調剤薬局は往診先で共に患者の状態を把握し、専門家として薬の情報も教えてくれます。また、基礎疾患がある患者へ処方箋を出すときは、薬の調整や飲み合わせの注意（他医療機関から薬が出てるケースなど）についても助言をいただけます。
- 情報共有システムの導入により、施設側も入居患者の状態を見て医師へ相談するなど、関係者間でコミュニケーションを取りやすくなつたのでは、と感じています。



社会福祉法人牧羊会 小川 望 理事長（シオンの丘ホーム 施設長）

- 調剤薬局との連携で、入居者による薬の飲み間違いが起きたときの対応を相談できるほか、薬の量が多い、飲みにくいなどの情報を連絡しておくと、薬の処方について主治医に相談してくれます。また、薬の飲み方の指導や、飲みにくい薬をあらかじめ碎くなどの対応もしてくれます。在宅では、残薬情報を連絡しておけば、それをもとに次の薬の量を調整してくれます。
- 私たちの施設では、入居者の入院者数・入院期間が減少したデータがあります。早い段階で医師などへ相談・対応措置が取れるようになったためだと考えています。

◆その他取組の特長、今後の展開など

- 平成26年に高松市鶴市町にて、社会福祉法人牧羊会 総合ケアセンター ヨハネの里がオープンしました。隣には我々も薬局を新設するほか、将来的に病院も開設する予定で、ケアサービスの拠点化を目指しています。一方、弊社のみでは薬剤師の人数が足りません。遠隔地では、地域の調剤薬局と連携できればと思います。
- 現在、弊社を中心に調剤薬局の連携の輪を広めています。地域の調剤薬局薬剤師が医師と一緒に施設をまわり、患者から処方箋を預かり薬の受注・調剤・配達までを一貫して対応できる「スーパードラッグファクトリー」構想の実現を目指します。地域の調剤薬局は規模も小さく、配達が可能でも調剤まで手掛けることが厳しい企業も多いです。調剤は弊社で引き受けるなど役割分担を行い、地域の調剤薬局がまさしくかかりつけ薬局として、より在宅や施設への訪問と配達に注力できる仕組みを構築したいと考えています。